

Contents Vol.213

2017.4.1

02 ごあいさつ

03 NEWS

- 1 平成29年度入学試験志願者数確定
- 2 公務員試験
- 3 2016キャリアフェスタ
- 4 4博士誕生 博士論文発表会
- 5 修士論文発表会
- 6 体育学部卒論発表会
- 7 健康福祉学部卒論発表会
- 8 3教員に大島鎌吉賞
- 9 1個人2団体に後期学長賞
- 10 ゼミ生2人受賞 日本スポーツ産業学会で

08 特集

- 1 3教授、大いに語る —特別座談会—
- 2 3教授、最終講義

13 トピックス

- 1 くまとりロードレース
- 2 OUIHSスポーツキャンプに150人
- 3 ちびっこレスラー全員集合!!
- 4 アスリート・キャリア・トーク・ジャパン2017
- 5 スキー実習に208人
- 6 特別支援教育 教育講演会
- 7 退職教員の会
- 8 高齢者1人 支えるのは1.2人
- 9 国際ストレングス学会活動報告
- 10 延世大との大学院国際学術交流会
- 11 男子体操部 中国、豪州チームと合同練習
- 12 院修了式、学部卒業式

18 コラム 窓

- 19 我が青春の記 下河内洋平 比嘉靖

指導者足り得る知識と経験を



浪商学園理事長
野田賢治

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。学園を代表して心からお慶び申し上げます。

大阪体育大学は、1965年（昭和40年）、東京オリンピック開催の翌年に開学し、一昨年創立50周年を迎えました。開学にあたり、東京オリンピックの強化本部長を務められた大島鎌吉先生を副学長として、国際スポーツ科学会議委員であった加藤橘夫先生を学部長としてお迎えしました。

お二人の体育・スポーツにける思いが、本学の源です。創立百周年を超える大学がいくつもある中では、比較的新しい大学ではありますが、いまや卒業生2万人、在学生2700人の大学に成長しました。

卒業生の皆さんは、教育界、スポーツ界、実業界、マスコミ界、そして福祉の世界などさまざまな分野で活躍されています。

2020年には、56年ぶりに夏季オリンピック、パラリンピックが東京で開催されます。皆さんは在学中に、幸運にも身近にそれを体験することができるのです。さまざまな分野で積極的にかかわってほしいと思います。必ず皆さんの将来に大いに役立つはずです。

世の中は複雑で混沌（こんとん）としています。雇用状況も決して良好とは言えません。しかしそんな中でも大阪体育大学は、昨年度は教員採用試験に現役で27人が合格を果たしました。就職率は体育学部99.2%、健康福祉学部97.1%、両学部で98.8%で、文部科学省、厚生労働省がまとめた97.3%を上回っています。

今春卒業する学生では、警察官、消防官、行政職の地方公務員が80人、法務教官、刑務官、自衛官の国家公務員が11人、延べ91人が合格しています。

大阪体育大学での学びは、社会のあらゆる場面で、指導者足り得る知識と、経験を身につけることができると思います。皆さんが立派な社会人として成長されることを祈って祝辞とします。

スポーツに内在する意義と価値



大阪体育大学学長
岩上安孝

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。

2016年リオデジャネイロでのオリンピック・パラリンピックが終了し、いよいよ2020年、東京開催に世界の注目が集まってきています。

1964年8月21日、ギリシャのオリンポスで採火された聖火がアジア諸国を巡り、9月7日に沖縄県に、鹿児島県からは西日本ルートと北海道からの東日本ルートでリレーされ、10月10日、秋晴れの国立競技場聖火台に、アジアで初の聖火が灯されました。

日本選手の活躍と相まって世界のアスリートが繰り広げるパフォーマンスは、国民のスポーツ熱を高め、我が国スポーツ振興の導火線となりました。

子供たちの健全育成を目指したスポーツ少年団の輪が全国に広がり、東洋の魔女と称された女子バレーボールの金メダルは、ママさん達をバレーボールコートに引き込み、バレーボール人気を不動のものとするなど、スポーツが日常生活文化として、根付いていくきっかけとなりました。

国においても1966年に、10月10日を国民の祝日に指定するとともに（2000年のハッピーマンデー制度により10月の第二月曜日に）広くスポーツ振興を支えるスポーツ施設の整備基準や、指導者の養成・確保などを盛り込んだ各種の施策を、全国の自治体と共に計画的に進めていく答申を1972年に示し、国民の誰もがスポーツに親しめる環境づくりに着手する一歩を踏み出しました。

我が国にとって二度目の開催となります2020年、皆さんの思いはいかがでしょうか。

2013年9月7日、アルゼンチン・ブエノスアイレスでのIOC総会における開催地決定コールは、国内を歓喜に包みこみましたが、その後、新国立競技場建設案や、エンブレム案の白紙撤回、コスト面を含めた競技施設の再検討などが議論の俎上に挙げられ、世界最高峰の舞台づくりは、容易でないことが示されました。

これからは日本選手の活躍に向けた育成強化を第一に、それを支える科学的サポートの一層の高度化が求められてきますが、スポーツの価値をゆがめるアンチ・ドーピングの撲滅対策にも力を注ぎ、そして何よりも東京開催が世界の平和を一層推進していく上での潤滑油の役割を果たしていかなければなりません。

本学に入学されました皆さんは、これからは傍観者の立場ではなく、自らの課題としてとらえ、どのように対処すべきかを自問自答してみてください。

これからの大学生活を通じて、スポーツに内在する意義や価値を十分に学び、スポーツの素晴らしさを未来へと継承し、活力ある社会の構築に貢献できる資質を養っていき下さい。

平成29年度入学試験志願者数確定

平成29年度の入学試験は3月3日の教育学部後期入試で全日程を終了した。志願者総数は2796人で、前年比89・9%となり、2年連続の減少となった。

教育学部は1903人で、前年比86・1%。昨年度はスポーツ教育学科の減少が大きかったが、今年度は健康・スポーツマネジメント学科が前年比78・9%の減少となった。教育学部は、小学校教育コースと保健体育教育コースでは対照的な結果となった。小学校教育コースは218人で前年比71・5%と減少したが、保健体育教育コースは675人で、前年比113・1%の大幅増となった。

現時点では他大学も入試がすべて終了しておらず、また結果を公表していない大学もあり、最終の入試結果が出そろうていないが、全国の私立大学の志願状況は、10%近い増加となりそうだ。特に関東、東海、近畿の3大都市圏でその傾向が強い。また「文高理低」の傾向も継続し、なかでも社会科学系が大きく志願者を伸ばしている。

体育・スポーツ系は10%近く増加していると予測されるが、増加分ほとんどが新設の学部であり、既存の体育系大学の志願者状況は前年並みである。

教員養成・教育学系では、ここ数年の減少傾向は継続されると予測されている。

各大学が併願パターンの多様化、受験料割引などの入試制度の工夫や、奨学金制度の充実に加え、研究成果や、教員面での学生サポート強化などを様々なメディアを通じて、高校生や高校教員に対しPRしている。その結果、「どうしてもこの大学に入りたい」と思う受験生一人当たりの受験回数を増やしているのではないかと思われる。今年度の入試は終了したが、既に次年度入試での巻き返しに向けて高校生へのPR活動はスタートしている。入試サイトでの受験生への動画配信や、接触者への継続的な情報提供を強化、進学相談会やガイダンス、高校訪問など対面型活動もさらに強化し、本学の魅力を発信していきたいと考えている。

(H29・3・22現在) 【入試部】

◆ ◆ ◆
大学院の平成29年度入試の志願者総数は、博士前期課程の16人は前年度比66・7%と減少し、博士後期課程の11人は前年度比157%と増加した。次年度入試に向け、本学大学院の魅力をより伝えるように広報活動を行い、志願者増に繋げたい。

【大学院事務室】

＜教育学部 教育学科＞

入試制度	学 科	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数
AO入試	小学校教育	5	35	35	8
	保健体育教育	5	44	44	8
	計	10	79	79	16
推薦入試前期E*	小学校教育	5	23	23	10
	保健体育教育	15	57	57	21
	計	20	80	80	31
推薦入試前期F*	小学校教育	20	32	32	27
	保健体育教育	5	40	39	6
	計	25	72	71	33
推薦入試後期	小学校教育	10	9	9	8
	保健体育教育	5	28	27	6
	計	15	37	36	14
一般入試前期E	小学校教育	-	-	-	-
	保健体育教育	15	234	231	62
	計	15	234	231	62
一般入試前期F	小学校教育	25	98	96	-
	保健体育教育	5	195	194	-
	計	30	293	290	156
一般入試後期	小学校教育	5	21	21	-
	保健体育教育	5	77	76	-
	計	10	98	97	14
合 計	小学校教育	70	218	216	-
	保健体育教育	55	675	668	-
	計	125	893	884	326

※内部、指定校推薦入試含む
※一般入試前期F、後期の合格者数は第2志望制度を実施していますのでコース別では記載していません

＜体育学部＞

入試制度	学 科	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数
AO入試	スポーツ教育	35	64	64	37
	健康・スポーツマネジメント	20	167	167	30
	計	55	231	231	67
スポーツ特別AO入試	スポーツ教育	75	121	121	121
	健康・スポーツマネジメント	25	23	23	23
	計	100	144	144	144
推薦入試A*	スポーツ教育	70	232	229	78
	健康・スポーツマネジメント	35	104	103	38
	計	105	336	332	116
推薦入試B*	スポーツ教育	35	165	162	40
	健康・スポーツマネジメント	45	132	131	54
	計	80	297	293	94
一般入試A	スポーツ教育	60	277	274	69
	健康・スポーツマネジメント	40	131	130	67
	計	100	408	404	136
一般入試B	スポーツ教育	45	311	309	82
	健康・スポーツマネジメント	35	173	171	105
	計	80	484	480	187
外国人入試	スポーツ教育	若干名	2	2	2
	健康・スポーツマネジメント	若干名	1	1	1
	計	若干名	3	3	3
合 計	スポーツ教育	320	1172	1161	429
	健康・スポーツマネジメント	200	731	726	318
	計	520	1903	1887	747

※内部、指定校推薦入試含む
＜大学院スポーツ科学研究科 博士前期課程＞

総計

	定 員	志願者数	受験者数	合格者数
一 般 選 抜	24	10	10	8
学 内 選 抜		3	3	3
ス ポ ー ツ 選 抜	若干名	1	1	1
社 会 人 選 抜		1	1	1
外 国 人 選 抜		1	1	0
合 計	24	16	16	13

学内選抜入学試験

	定 員	志願者数	受験者数	合格者数
学 内 選 抜	若干名	3	3	3
合 計		3	3	3

A日程入学試験

	定 員	志願者数	受験者数	合格者数
一 般 選 抜	A日程課程で24名	7	7	6
ス ポ ー ツ 選 抜		1	1	1
社 会 人 選 抜	若干名	1	1	1
外 国 人 選 抜		1	1	0
合 計		10	10	8

B日程入学試験

	定 員	志願者数	受験者数	合格者数
一 般 選 抜	A日程課程で24名	3	3	2
ス ポ ー ツ 選 抜		0	0	0
社 会 人 選 抜	若干名	0	0	0
外 国 人 選 抜		0	0	0
合 計		3	3	2

平成28年度の公務員現役合格者が3月1日現在、延べ91人となった。内訳は国家公務員(法務教官・刑務官・自衛官)11人、地方公務員(警察官・消防官・行政職)80人。昨年度の76人から大幅に合格者数を伸ばした。消防士は、2年連続過去最高を更新する29人の合格者を輩出。大阪府警をはじめとした警察官も昨年を上回る50人の合格者となり、公務員合格者は、過去5年で最高の合格者数となった。

筆記試験の学力向上、突破を目標に、平成28年度卒の4年生は、これまでの公務員対策講座、学習支援室との連携に加え、公務員対策講座の回数を増やし、模擬試験を年3回、フオーアアップ面談を行うなど、学力向上にさまざまな方策を行ってきた。この春から始まる新4年生は、新たに学習支援室との連携による論作文対策講座を設け、更なるキャリア醸成の充実を図ってきた。就職本番を迎えた今年の活躍に期待している。

恒例の全学あげてのビックイベントとなった『キャリアフェスタ』は、3年生を対象に9月に開催し、大手業界の人事担当者を招き、2日間で26の企業、団体、進学等のブースを設け、学生は1日4ブース各業界の話聞く。1、2年生は2月に開催し、2年生対象は、各業界で活躍しているOB・OGを招き、14のブースから4つを選択し、先輩や内定者の話を聞く。1年生対象は、「将来

公務員現役合格者延べ91人、過去5年間で最多

向上していく進路への意識！ 就職状況

について考えよう」のテーマで2組の特別講演を行った。

キャリア支援の特徴のひとつである学内セミナーは、企業等の人事担当者から昼休みを利用して説明会を開催。例年採用していたらいている企業をはじめ、新規に開拓した上場企業、福祉、医療、生涯スポーツなど、昨年度を上回る100回超の説明会を開催した。

近年、世間の体育会系の評価が高まりつつある中、本学の学生への各業界からの期待や採用ニーズは、一層高まっていると感じている。

3月1日時点では、企業等に就職する卒業生は267人(企業・スポーツ関連・医療・福祉・自営業)で、キャリアフェスタや学内セミナーをきっかけに、進路を決定する学生も多い。

キャリア支援センターでは「学生自らがキャリアデザインを考えた、自分の将来ビジョンを設計できるような支援する」とし、あいさつや、人の話を聞くこと、社会のルールを順守するなど、生活習慣の重要性(1年生オリエンテーション)から、社会の仕組みや業種・職種研究、社会人としての心構えや常識(キャリアデザイン・キャリアフェスタ)などを通して、より積極的に支援を進め、社会で活躍する学生の育成を目指している。【キャリア支援部】

キャリアフェスタで意識改革

1、2年対象、教育学部生初参加

1、2年生を対象にしたキャリアフェスタが2月3、4両日行われ、1、2年生とも真剣に向き合った。2年生対象のフェスタには、初めて教育学部の学生も加わった。

「来年の目標、卒業後の目標を考え、OGから『社会』を考えよう!!」をテーマにした2年生のフェスタ。

入学時に教育関係、スポーツ関連企業に進みたい意向が圧倒的に多い2年生にとって、商社やメーカーなど企業について聞くのは初めてとあって「会社、企業、社会の話」に高い関心を示していた。

「ミスマッチ」で、就職したのにすぐに辞める傾向が目立つことから、企業担当者が「大学生活の中でどんな職業につきたいか、そのためにはどんな学生生活を送れば良いのか、じっくり考える時間が必要」とアドバイスをした。

教員関係では、平成29年度教員採用試験に合格した4年生が学生生活を振り返り、「ボランティア活動に積極的に参加した方が良い」などの話をし、2年生からは熱心な質問が続いた。

1年生は、元サッカー日本代表の勝矢寿

延さんと神戸市立摩耶兵庫高校で教べんとする石川一弥さん(14期生)の講演を聞いた。「自分ができることを続けると夢は実現する。目標を持って、今日からでも行動を起こしてください」。

93年の米国W杯アジア地区最終予選で、左サイドバックの都並敏史という絶対的な選手が故障。空いたポジションをつかんだのが勝矢さんだった。「自分はスターティングメンバーになることはないと思っていたが、チームのために何ができるのか、チームの雰囲気を考えて行動した」。その中で巡ってきた北朝鮮との第3戦。ここで結果を残した勝矢さんは先発に名を連ね、主力に定着した。

石川さんは、02年に両目を失明する病を患いながら、現在も教壇に立っている。光を失ったからは国立神戸視力障害センターで1年間訓練して点字を学び、懸命の努力の甲斐があり、わずか2年半で再び教壇に戻った。

現在勤務する高校では「学校に行きたくても行けない子ども達もいる。病気で失明し、家から出たくない、やる気が起こらないといった自分の経験から、そういう子ども達の気持ちが少しづつ分かるようになった」と話し、教員を目指す学生には「若いエネルギーを発揮し、学校に来てよかったな、と思ってもらえるような先生になっ



石川一弥さん



勝矢寿延さん

4人の博士誕生 博士論文発表会



国正陽子 (指導教官 石川昌紀)：下腿の骨格・筋腱形態の発育過程における変化とケニアのエリート陸上中長距離選手の特徴



片上絵梨子 (指導教官 土屋裕睦)：Influence of received social support on athletes' self-confidence and psychological well-being



陳 昱龍 (指導教官 土屋裕睦)：スポーツにおけるライフスキルに関する中日比較研究



清水聖志人 (指導教官 土屋裕睦)：トップレベル競技者におけるライフスキルとキャリア形成の関連：トップレベルレスリング競技者を対象として

第18回と19回博士論文発表会が1月18日と21日、本学L号館(開学50周年記念棟 L301教室)でそれぞれ行われ、参加者、109人(延べ)を前に4人が発表した。

第18回発表会では、片上絵梨子さんと国正陽子さんが、第19回発表会では、清水聖志人さんと陳昱龍さんがそれぞれ発表会に臨んだ。東京2020オリンピック・パラリンピックを控えていることもあり、関係するトピックの研究が多いのが特徴だった。

発表会後、4人とも学位論文を完成し、口頭試問を無事終え、博士の学位授与の資格を得た。博士の学位取得は、通過点と良く言われる。学位取得後の活躍を期待している。

【体育学部教授 石川昌紀】

各発表に苦心の跡 修士論文発表会

第28回大学院修士論文発表会が1月21日開催されたII写真II。発表された17演題は、野外活動、医学、体育科教育学、心理学、フィットネス、バイオメカニクス、マネジメントなど、本学大学院スポーツ科学研究科の多様な研究分野を反映して、大変バラエティーに富んだ内容となった。荒木雅信研究科長から開会のあいさつがあり、2年間の研究の集大成として発表が堂々と行われることを期待する訓示があった。

近年は1会場ですべての演題の発表を行う形式を採用している。この形式にして3度目の修士論文発表会だったが、分野をまたいですべての発表を聞き、またディスカッションにかかわることができるとは、良い機会であると感じている。本学大学院研究科は、多くの研究領域を有した総合的なスポーツ科学研究の組織であり、そうした特性を生かすためにも1会場での開催は効果的であろう。

発表では、10分程度の発表時間の中で、2年間の研究活動で得てきた知見を披露することに四苦八苦しながらも、それぞれの思いを込めた熱い発表が続いた。もちろん短い時間の中で述べられることは少なく、各発表ともどのように集約して効果的に伝えるか、という点に苦心した跡がうかがえた。



おそらくは自分の表現したいことが表現しきれずに、不完全燃焼であった学生もいたことと思う。しかしながら、自分の考えを時間の制約なく表現できることはむしろ少なく、彼らにとっては10分にまとめるという作業も貴重な体験となったのではないかと思う。

「問う」が求められる卒論

体育学部卒論発表会

体育学部の平成28年度卒業論文発表会は1月14日行われ、15題の発表があったII写真II。多数の学生と教員の参加のもとで体育・スポーツに関するさまざまな研究発表が行なわれた。

最後に本年度で退職される中大路哲教授より、閉会のごあいさつをいただいた。長年のバスケットボール部女子での指導になぞらえ、地道な努力の重要性を述べられたのが印象的だった。

修士論文発表会の開催にあたり、運営や事前準備にあたっていただいた教職員の皆様、当日座長を引き受けてくださった先生方に、この場をお借りして感謝を申し上げます。ありがとうございました。

【体育学部准教授 菅生貴之】



私は昨年度に続き教務委員長として参加した。私の所属する教養教育センターは大学で学問するための基礎力の充実、及び多様な視点獲得のための教養教育を担当している。初年次の「日本語技法」等の基礎教育科目と一般教育科目だ。卒業論文発表会は、それらの教育がどうあるべきかを考えるよい機会になる。卒業論文は、専門教育の内容

から問いを見つけ、その答えを導く営みである。そこでは、まず問いを立て、問いに対する答えを求めて調査、実験、観察、文献収集を行い、それら事実から論理的に答えを導くことが求められる。

この経験は重要だ。意見を述べるには根拠を客観的、具体的に示すことが必要であり、それが容易でないことを実感できる。大学は「学び」「問う」場だ。卒業論文ではその「問う」が強く求められる。この経験は、将来直面する課題に対処する際に生かされる。事実から導けることと、自分の伝えたいことを混同しない態度を身につけるのは特に有用だ。

大学で学問に真剣に取り組む価値は、問に対する答えを、事実に基づき導くことが容易でないことを経験をした点にある。卒業論文はまさにその経験を強くさせてくれる機会だろう。今回の発表会に参加してその思いを強くした。

【体育学部教務委員長 工藤俊郎教授】

3会場で128人が発表

健康福祉学部卒論発表会

1月19日（スポーツ福祉系は19、26日の両日）にソーシャルワーク系、教育福祉系、スポーツ福祉系の3会場に分かれ、総計128人の卒業論文発表会を実施したⅡ写真Ⅱ。卒業論文作成が必修となつてから始めた卒業発表会だが、今年で4回目になる。3年生の時から温めてきたテーマを、卒

論としてまとめて提出したのが、昨年12月初旬。発表当日は、3年生を前に緊張した面持ちながら、書き上げたという自信が伝わってくる4年生たちだった。

卒業論文のテーマは、系の学びにとらわれず個々の興味関心、自由な発想を大切に設定され、文献研究、調査研究、実践研究、事例研究とさまざま。健康福祉学

部の卒論の特徴といえるのは、学生は4年間、社会福祉・教育・スポーツの領域全体を学んでいるので、3つの方向から自由に切り込んでいるテーマが多いこと、自らの実践に基づくことが多いことだ。

たとえば、ひとつ「スポーツ」と言っても、競技力の向上を目的としたものから、障がいのある人とともに楽しむスポーツの追求、重い病気のために入院を余儀なくされた子どもへの運動の実践、幼児体育の実践、そして教育現場での体育・スポーツのあり方まで幅広くということだ。

もう少し時間をかければ、もっとよい論文になっただろうというものもあったが、その反省も含め、4年生には大学生生活最後のまとめにふさわしい全力投球の卒論発表会となったと思う。

【健康福祉学部長 板原和子教授】



3教員に大島鎌吉賞

優れた指導者などを顕彰する大島鎌吉賞の授与式が3月2日、本学中央棟大会議室で行われ、体育学部の楠本繁生准教授、松田基子准教授、村上雷太助教の3人に、野田賢治理事長から賞状が贈られた。

野田理事長は「今年も3名の先生方にこの賞を授与できてうれしく思う。本学の競技力、クラブの力が受験生確保に大いに貢献している。クラブ活動だけでなく、大学が世の中にどのようにアピールしていくかを考える良い機会でもある。直接クラブ活動にかかわっていないくとも、『日本一のクラブに負けないぞ』という気持ちで、それぞれの取り組みに頑張っていただけならと思います」とあいさつ。

これを受けて楠本准教授は「日ごろから学生をサポートしていただいている教職員のみなさんや、ハンドボールのスタッフの先生方の力、何より学生の努力のためのもので、このような賞を受賞できた。学生が4年間を過ごし、卒業する時に、大体大に来て良かったと言ってもらえるような指導をしなければと思う」と学生を思いやり、松田准教授は「昨年に引き続き受賞させていただき、大変光栄です。一生懸命頑張ってきた学生たちから感謝する。大体大の卒業生として母校の指導ができることは本当に幸せだと実感している。大きなプレッシャーもあるし、思うようにいかなくて悔しいこと、苦しいことなどたくさんあるが、それをはるかに上回るやりがいを感しながら、日々取り組んでいる。この気持ちを忘れることなく、情熱を持ち続けて頑張っていくきます」と喜びと決意を述べた。

最年少受賞の村上助教（現講師）は「このような賞をいただき、大変光栄です。崎先生をはじめ、たくさんの方にサポート、指導をいただき、何よりも学生が頑張ったからこそ結果だと思っている。一日一日を大切にして、学生とともに精進していきます」と謝辞を述べた。

楠本准教授は「高松宮杯第52回全日本女子学生ハンドボール選手権大会」で優勝、松田准教授は「平成28年度講道館杯体重別選手権大会」で山本沙羅選手を3位に導き、村上助教（現講師）は「第64回全日本学生剣道選手権大会優勝」が評価された。



授与式に臨んだ野田理事長、村上助教（現講師）、松田、楠本准教授、岩上学長（左から）

1個人2団体に後期学長賞

平成28年度後期学長表彰式が1月20日、行われ、1個人、2団体が受賞。選手たちの功績がたたえられた。

壇上に上がる選手たちの表情が誇りに満ち溢れていた。今回は、1個人、2団体と受賞対象は少なかったが、その内容は素晴らしい。ハンドボール部女子は第52回高松宮記念杯で優勝して見事4連覇を達成。対学生103連勝という前人未踏の金字塔を打ち立てた。佐々木春乃前主将(体育4年)は「これで3年連続での受賞だが、自分たちの代でもらえるのは格別。周りのサポートに感謝です」と振り返った。同部は12月に行われた第68回全日本選手権でも実業団



(前列左から細川事務局長、佐々木さん、岩上学長、上原さん、金持さん)

相手に連勝し、初の4強にまで勝ち進んだ。楠本軍団の勢いはまだまだ止まりそうにない。

剣道部男子は、第64回全日本学生剣道優勝大会で優勝し、13年ぶり3回目の学生日本一に輝いた。剣道部は厳しい練習を乗り越えての栄冠だった。ほぼ毎日7時過ぎからの早朝練習をしてきた。休みも月に2回あれば良い方だという。バイク通学やアルバイトも禁止で、まさに「剣道漬け」の日。上原裕次郎前主将(同)は、「ずっと目標にしていた日本一だったので、このような賞までいただけうれしい。練習は嘘をつかないので、後輩たちにも剣道と向き合っただけで、後輩たちにも剣道と向き合っただけで、後輩たちにも剣道と向き合っただけで」とエールを送った。

唯一個人での受賞となった金持義和選手(大学院)は個人でタイトルを総ナメにした。金持選手は第11回日本ろう者水泳選手権大会で百メートル背泳ぎ、五十メートル自由形で優勝。大学院で研究も続けており、文武両道を形にして見せた。金持選手は壇上で「絶対に4年前の自分を越える」と、今年行われるデフリンピックへの意欲を語った。今大会は自信を深めるきっかけになったに違いない。

岩上安孝学長も「チームワークを大切に、さらなる飛躍を期待している」と背中を押した。今、各部活動では新チームとなり世代交代が進んでいる。次回の表彰式では誰が、どの部活動が選ばれるのか。今から楽しみだ。【学生記者 竹村 岳】

ゼミ生2人受賞、日本スポーツ産業学会で

体育学部教授 藤本淳也

日本スポーツ産業学会第4回冬季学術集会は2月11日、大阪成蹊大学で開催され、藤本研究室の4年生5人が卒業論文を発表した。笹川スポーツ財団賞(学部の部)で齊藤圭祐さんが最優秀賞、原田愛里紗さんが優秀賞を受賞した。学術学会での発表にチャレンジした学生諸君に敬意を表するとともに、研究にご協力を頂いた学内外の関係者の皆様にご礼を申し上げます。

私の研究室は、スポーツマーケティングの理論を学び、実践に触れ、スポーツの発展に寄与する研究をまとめる活動を行っている。演習では、スポーツビジネスに関するプレゼンテーション、ビジネス雑誌記事のレビュー、スポーツマネジメント研究論文のレビューを繰り返す。そして、研究室が展開する5〜8人のリサーチプロジェクトのデータ入力・分析、報告書作成の役割が与えられ、それに加えて4年生は卒業研究に取り組んでいる。どちらかというと「忙しい研究室」です。今回の受賞は、これらの活動に積極的に取り組み力をつけた4年生と、彼らの支えとなった大学院生の全員の成長が認められたように思う。

これからも、学生と共に新たな研究に取り組んでいきたい。発表

とテーマは下記の通り。

齊藤圭祐(最優秀賞)「サッカー専用スタジアムのスタジアム雰囲気に関する研究」
スタジアム雰囲気尺度を用いた観戦者調査の分析から」
原田愛里紗(優秀賞)「女性プロサッカーファンのファッション意識に関する研究」
「セレ女」に注目して」
立間悠暉「関西学生大学スポーツの新聞露出価値に関する研究」
種目間とチーム間の比較分析」
松山倫也「高校生の大学PR動画視聴が大学認知と大学イメージに及ぼす影響」
中村優志「Bリーグ観戦者の特性に関する研究」
クラスター分析を用いた観戦者の分類」



受賞を喜ぶ齊藤さん(左)、原田さん

3 教授、大いに語る

— 特別座談会 —

大阪体育大学創成期から大学とともに歩まれ、今日の礎を築かれたご三方が定年退官されます。「西の大体大、東の日体大」と言われるまでにさせていただいたご三方にお集りいただき、大学での思い出、これから大学に期待することなど、忌憚のないお話をさせていただきたいと思います。

【司会はOUHSジャーナル編集長 相馬卓司客員教授、写真は中村優志】

最終講義について

—ご三方はそれぞれ最終講義をされましたが、振り返って言い足りないことがあればお話しいただきたいと思えます。

坂本 言い足りなかったというよりも、言わなければいけないことが多すぎて、まとめるのに苦労しました。でも自分の本音で話が出たかなと思っています。

滝瀬 かなり難しかったです。私の場合、水泳部のことは全然話さなかった。学生たちと歴史を振り返ったり、話をしたりすることがなかったもので、申し訳ないなど思っています。これからのあるべき姿、一番苦しかった勉強のことだ

けは伝えたかったのです。

言い足りなかったことは、水泳に関することです。研究のところにスポットを当てさせてもらいました。

—中大路先生はバスケットボール教室と、最終講義という二部構成だったのですね。

中大路 大阪の中体連のバスケット講習会を各地区持ち回りで、毎年やっています。たまたま私が泉南地区担当で、(男子の)卒業生、浜口君が熊取中学で指導していたので、体育館で1時間、実技をやり、教室で1時間お話しさせていただきました。特に言い足りなかったことはないです。

自分のクラブに愛着を持つため

には、プライドを持たせなければいけないので、そのための方法を指導者として考えなければなりません。他の大学とは違うんだという意識を持たせないと試合にも勝てないです。

—「私にとって大阪体育大学とは」を600字くらいにまとめるとしたら、どういうことになりますか？

滝瀬 母校ですので、母校愛の気持ちはあります。若い時は特にですが、体育大学の学生が悪口を言われたら、前に出てかばってやるという気持ちはありました。私だけか

もしもですが、やんちゃくれだったです。私が一番嫌だったのは、「体大生は出来ない」というレッテルを張られていたことです。それに対してものすごく反感がありました。

大学に入ってからしんどかったですね。水泳担当は僕1人、授業が12コマ。朝、昼、夜連は室内プールを借りました。

体育大学の学生は根性があります。勉強は根性がなかったらだめです。体力も必要です。レッテルを張られるのがいやだったから、あらゆることに挑戦しました。体大生は、ちょっときつかけを与えてやれば出来ますよ。夢を達成出来るところが体大生が一番良いところ。先生方全体でスクラムを組んでいけば本当に良い大学になると感じています。

坂本 人生の7割以上ここにいたわけですから、生きざまをこの中でどう発揮するかということから始めたのです。1年に一度しかあがれない4部リーグからサッカーをスタートさせて、その時に私は「こんなことでは、サッカーなんてやって面白くないだろう。1部に上がって一緒にやろう」と言ったら、上級生が白けてね。「だから、上級生が白けてね。」「だれどやるからにはやろう」とやったわけです。4年間で1部に上がられなくて、その年の夏に上がり、今度は「どうしたら日本一を取れるか」になりました。「教育がベースにないとサッカーだけやっても仕方がない」と、次の年から全学



滝瀬教授

生の成績をチエックしました。日本一になったら彼らもプライドを持って仕事が出るけど、2部、3部でプレーしていたら、死んでしまう」という思いが強かった。だからどうしても強くなって卒業生にプライドを持ってほしいというのが、私の生活の中にありました。

1部に上がった年以後援会が出来、10万円ぐらいだったですけど、「これでサッカー部を強くして欲しい」という思いが皆さんから伝わってきました。サッカー部が送り出した卒業生が約1500人。そのうち500人以上が全国で教員をし、またサッカー関係の仕事をしています。これが私の一番の喜びです。卒業生が頑張ってくれ、その息子たちが来てくれる。30人近くいます。

高校サッカーで日本一になったOBで、青森山田の黒田監督の息子が（大体大に）来てくれます。お父さんが通った体育大学で、「指導者になるための勉強がしたくて」と言っていましたけど、本当にうれいす。

——苦労した時期があつて1部に定着し、さらに学生日本一になるという偉業まで達成されましたけど、先生ご自身が考えていたことがある程度なし遂げられたということですね。

坂本 そうですね。高校の恩師から「高校に帰って来い」と言われましたが、大学に残りました。教員という仕事は「無限大にいろん

なことが広がる」と目標を持たせ、その中で何を選りかえてやるかということだと思っています。サッカーと、教員として良い生徒を育てる、生きがいのある仕事だと言いつつ聞かせながら、本当によく体が持ったなと思いましたが。

——中大路先生も苦労の時期を乗り越えられた常勝軍団にされたわけですか。

中大路 僕は大体大の卒業生ではなく、妙なご縁で来ました。教員採用試験に受かっていたので、高校の教員になっていたはずなんですけど、細川先生からお誘いいただいて来た訳です。来て良かったと思っています。若いころ、（大体大に）勤めていてからも、いろんな大学からお誘いを受けました。

昭和61年の神戸のユニバーシアードの時に、私の恩師に「筑波大に）来てくれ」と言われたけど、お断りしました。その辺から大体大に骨を埋めるということがはつきりしました。妙なことに私の先輩、後輩から選手を送ってもらったことがないです。

大体大の卒業生からは、何人かいるのですけどね。日体大だったり、中京大だったり、福岡大だったり、他の大学を卒業した先生方から選手を送ってもらっています。



中大路教授

大体大生としてのプライド

——「三方の一致した思いは「大体大生としてのプライド」を持つて欲しいということですね。」

坂本 実績を残さないとプライドは持てません。学生が日本一という体験をしないとプライドなんて持てませんよ。筑波があり、早稲田、慶応、明治、中央、順天などがある中で、関東と戦うのだということ、そこで勝つということはどういう意味があるか、強烈に感じました。

滝瀬 学生を含めて、大学がプライドを高めるようなことが出来ないのでないかと思ってしまうます。学生時代にプライドを持たせるような教育が必要ですよ。

中大路 僕が昭和49年に来たころは、5期生、6期生の時でした。バスケットの大体大は知っていましたが、浪商学園は知りませんでした。リクルートに行つて、名もなような、単に教員免許だけ出すような大学と、大体大が比べられるなんてあり得ないことですよ。

滝瀬 体育大学に来たら自信をつけてあげないと。坂本先生が競技の面で言われましたけど、あらゆる面で「これが体育大学の学生か!!」と思われのがちょっと弱いと思います。

——これから大体大を担っていく若手の先生の肩にもかかってきますね。自分の大学に自信を持ってない学生が結構見受けられますからね。

滝瀬 そういうことです。戦わずして負けることではダメだということ、全体を見てもそう思いますが。自信のない大学になってしまった感じですね。

最も印象に残っているシーン

——ご自身たちが大体大の教員としておられた中で、最も印象に残っているところは？

中大路 2回（インカレで）勝つチャンスがあったのに勝てなかったことです。特に2回目の時がその思いが強いです。1回目の時の方が強かったです。2回目の時は選手に力がなくて、関西2位、ノーシードでいって、結局最終的に筑波、早稲田に勝つて優勝しました。それが一番印象に残りますね。

力がなくても選手なりのプライドが持つて戦い、やりようによっては勝つんだということの証明です。テレビのインタビューで「インカレは？」と聞かれたので「うちみたいなチームが筑波、早稲田に勝つというのがインカレなんだ」と答えました。関東何するものぞという気構え持つて大体大が勝つんだということを示した。準決勝、筑波、決勝、早稲田となつて嫌だったんですけどね。（笑）

坂本 ひとは、若くして阪大の教授になられた先生がおられ「若い者は勉強勉強しろ」と怒られまして、ある時「おれの卒論はこんなだ」と紙切れ1枚ぽんと出し

て「ちよっとこれを見てみる。これはノーベル賞候補になった計算式なんだ」と見せられたんです。シヨックでした。やっぱり質を求めなければいけないということ、学部の世界で感じられたし、サッカーの世界では、私の恩師というか、サッカーの師匠である大商大の上田（亮三郎）監督、85年のインカレ決勝で対戦、延長やつて、再延長やつて決着がつかず、引き分け優勝になりました。私も部員も初めてのことで「わー」となっている時に、商大の連中がドーンと走ってきて胴上げしてくれたんです。大商大の監督の粋な計らいでした。

そしたら今度はうちの選手たち



坂本教授

が、上田監督を胴上げ、これは忘れられないですよ。大商大とうちでは、うちが一方的に追いかけて行って、その地位までなったということですよ。それまで大商大は3年間、関西のタイトル、日本のタイトル、全てのタイトルを取り続けましたからね。その最後の年がうちの決勝戦だったので。私の師匠と一緒に勝負出来るという最高の舞台で両校優勝ということになったので、一生忘れられないでしょうね。

滝瀬先生は研究するために語学も一生懸命やられたのですよね。

滝瀬 苦しいことは楽しいことなんです。分からないことが分かっていくという、それが楽しいのです。悔しいから（成績上位の者を）どんどん追いかけてました。

僕はお二人のような競技成績を収めていませんが、日本水泳連盟の委員をやっている、開会式、閉会式のあいさつをしましてね。うちの学生が優勝してくれて、プレゼンターになるのですよ。うれしくてあいさつができなくなりました。

滝瀬先生は研究で大阪市医学会市長賞を受賞されましたね。

滝瀬 ええ。あれは「全然違うことをやれよ」と言われて、（スイス留学中）全く言葉もわからな

かったので、登校拒否しました。登校拒否したら、次に行けないですね。でもだれも助けてくれない。競技と一緒に。僕は英語もドイツ語も分からなかったけど、大阪市医学会市長賞とアジア代表、オリンピックに関連してふたつ賞をもらいました。

失敗談は

やり残したことが、失敗談などあればお伺いしたいですね。

滝瀬 卒業論文を書かせる時に、

学生をギリギリまで指導していきいます。その時に何気なく「何やってるんだお前」とか、自分が言っている言葉が学生を傷つけているなということがあります。言っではいけないのですが、その時は気が付かないのです。それで学生を傷つけているんだと思います。学生は大学に来なくなりますよね。そこから人間関係が崩れていく、それを修正するのはものすごく辛いんです。信頼関係が崩れたら、成り立たないですからね。

フォロワーが難しいですね。か

といって「良し、良し」とばかり言っ

失敗談で登校拒否にさせたから、学生を立ち直らせるのはもの

すごく難しいです。

坂本 何が成功で、何が失敗かはよくわからないですけど。「失敗した時こそ、もう1回チャレンジしよう」という気持ちが必要ですよ。いろんな意味で失敗だらけですよ。ずっと成功したままなんて、あり得ないですからね。「なにくそ」と思っ

てやってきた44年間だと思いますよ。

中大路 悔やまれるのはインカレで2回優勝し、連覇がかかっている翌年の、決勝で同じ4点差、それも最後に逆転負けしたことでした。うまくやっていたら連覇出来たのにと悔やまれます。2回とも反省してみれば、ベンチミスです。選手

の起用ミスです。力のある2年生がけがをして、9月のリーグ戦から出てきましたが、控えの選手だったので、信用しきれなかったのです。

決勝の時も調子が良くて、そのまま最後まで使えば良かったのに、最後はスターティングメンバーに戻したら逆転負けしてしまいました。2回目の時も春から全勝でした。1敗は決勝の日本大戦でした。2年目というのは守りに入るとかと思いましたが、攻めていれば2回とも十分勝っていたんです。結局は1回目に失敗したことを、あまり反省していなかったのですね。大事に試合しようと思うと失敗します。守りに入ったら絶対負けますね。連覇のチームが10年以上ないんですよ。

ご三方の学生時代と今の学生

たちに大きな違いは感じられますか？

滝瀬 僕らのころは、やんちゃく

れでした。今はやんちゃくれないのか、やんちゃくれているのか、ありません。人数が僕らのころは定員が120人でした。坂本先生のころは、180人くらいだったのかな。少なかったですから、やんちゃくれているがなからうが、まとまっていきましたね。

学生を全員知っていましたからね。実習でも全教員が参加して、水泳、スキー、キャンプをしていたので、一人ひとりのことが分かっていた。だから学生は「故郷は遠きにありて近いもの、近くであって遠きもの」と非常に親しみを持つんじゃないですかね。そこが体大のいいところかも知れません。

だから実習でも全教員が全学あ

げて教育しているようなことをしてあげれば、教員同士も、大学の中も風通しが良くなるだろうし、学生たちとも触れ合いができて、と面白くなるかなと思います。学生数が増えて土台が大きくなってきているので、そういうところで培ってきたものと、クラブ活動で培ってきたものと、彼らのおかげがえのない財産になるんじゃないですかね。

坂本 今の若者がかわいそうですね、今の若者という表現は、あまりしたくないけど、我々の時代は夢を見たらそこに行けるとい

時代だったですね。今は「夢は見る

ものじゃない、叶えるもの」なんて言うものだから、その気になるのが少ない。これだけ多様化している中で、叶えられる夢がどれだけあるか。夢を実現させる方法が見つからない。そこに親がしゃしゃり出て来る。だから益々子どもたちが自分で考え、自分で行動して、何かしようというのがなくなってきた。

じゃあどうするかということなんです。僕はよくケンカしたんだけれども、「現場を見ないで、なんでお前がコーチなんだ」と。こういう話をよくやりました。現場を見てみると、その子の顔色も分かるし、体調も分かるし、どんな性格なのかも分かる。だからコーチは、現場を見て観察しろ、それから選手を触れと、タッチすることもあるし、そういうことをやらないと子どもたちは迷っているし、かわいそうな現状が今なんですよ。

夢が叶えられないですよ。今の状況では。何で自信を持つかという、今好きで自分がやっていること、うまい下手は別に、こんだだけ突っ込んで、こんだだけやっているということがなかったら、自信なんか出来ないでしょう。

中大路 時代があまりにも違っていますね。僕らの時代は普通に教員になるうと思っていたし、僕が勤めたころの大体大もほとんどの学生がそう思っていたようです。そして（教員に）なっていたんですね。今の学生たちは教員になるうと思っても、なかなか

れなかつたりするので、かわいそうだなと思います。

私は体育科教育コースなので、前のゼミ室などで早くから勉強していました。勉強していいのかなか受からない。でも時々どうかなと思ったりします。学生の間はクラブを一生懸命やったらと思うことがあります。

体育の教員になるのですね。自分は何かやり遂げたといものがないと。教員採用試験の勉強ばかりしていて、採用試験に受かって本当

に芯のある先生になれるのかなと思ってしまう。

だからその辺がこれからのうちの大学にかかわるところであって、教員というのは、一つの大きな柱であることはあまり変わらないと思うんです。

うちの大学を勧めるに時に、現役でどれだけ合格者を出すかということも、確かに大切なことなんだけども、出て行った人間が「どんな教員になっているか」ということが評価になるので、何人現役

3 教授、最終講義

3月一杯で体育学部の坂本康博、中大路哲、滝瀬定文3教授が定年退官した。坂本教授は、男子サッカー部、中大路教授は女子バスケットボール部を全国でも優勝し出来る強豪チームに押し上げ、滝瀬教授は水上競技部の部長の傍ら、スポーツ医学・生理学、水中運動化学の研究、発表と功績を残した。それぞれ最終講義を行い、どの教室もほぼ満席もなった。3教授は4月1日付で名誉教授を授与された。3教授の最終講義を要約した。（掲載は講義順）

コーチング論

坂本康博教授（2月15日、N201）

当初体育史専門だったが、コーチング論を担当する際、「コーチング学」ではなく、「コーチング論」ということで引き受けた。「学」は突き詰ると哲学に、「論」は私が思ったことを伝えることができ、学生にも分かりやすいと思ったからだ。私のコーチングベースは国際試合、大学での試合、練習試合を含め5500以上の試合の指揮を執った中で培ってきたものだ。良いコーチとは？常に学び続けることだ。小学生の試合、高校生の試合でもヒントになることはたくさんある。そして常に現場に出て、選手たちに触れること。机上の空論では選手たちは納得しない。ここぞの時にチャンスは手に

で受かったかというのは、大きな外に対する宣伝になりますね。卒業してから「学生時代何をしたか」ということも絶対、長い目でみたら評価の対象になりますね。
——長い時間ありがとうございました。
（座談会は3月2日に行われました）

〈出席者（あいうえお順）〉

坂本康博 長崎県出身。県立島原商業、1973年、大阪体育大卒。

翌74年4月、助手として本学に赴任、97年教授、サッカー部総監督

中大路哲 京都府出身。府立洛北高、1970年、東京教育大（現筑波大）卒。同年4月、助手として本学に赴任、94年教授、バスケットボール女子監督

滝瀬定文 和歌山県出身、県立串本高、1968年、大阪体育大卒。72年助手として本学に赴任、91年教授、水上競技部部長。

入れられないし、ピンチも乗り切れない。競技スポーツでは一瞬の判断が勝手を左右する。一瞬の判断をするために、常に選手に触れていなければいけない。

コーチングでは「飽くことなき情熱」「好奇心・知識欲」「行動力」も貴重な資質だ。常に、変化しているものをどう捕まえるかが大事だ。そして何のためではなく、だれのために役立つかを考えてもら

えたら、チームは良くなり、強くなる。

部の卒業生は約15000人。そのうち500人以上が先生をし、サッカー関係の仕事をしている。これは私にとって何よりの財産だ。スポーツで財を成すより、業績を残すより、たくさん卒業生が全国で頑張ってくれていることが何よりの財産。

在学中は師弟であっても、卒業したら仲間であり、サポーターだ。卒業生は在学生の活躍を応援してくれ、とてもうれしく思っている。そういう関係が卒業生とのつながりだ。また在学生も卒業生も、大抵はただではなく、サッカーだけではなく、多くの競技に興味を持ち、好奇心を持って接してほしい。

ひよんなことから、コーチング論を担当したが、そのお陰でいろいろの出会いがあった。何がどこ



笑顔がこぼれる坂本先生

で変化できるか分からないが、「こ
こはチャンスだ」「ピンチだ」「こ
こが一番の転換期だ」と思った時
に全身全霊を投げうって、それに
集中できるということが大切だ。
学生として4年間、教員として44
年間、大阪体育大学での48年の生
活は終わるが、ぜひとも大学を盛
り上げていただき、これからも良
い大学になるよう頑張っしてほしい。

強いチームを作るために

中大路哲教授（2月26日、L201）

強いチームを作るためには5つ
の考え方ががある。①チームに所属
していることにプライドを持たせ
ているか②チームワーク③統一さ
れた目標の明確化④安定性⑤伸び
る力だ。5項目を具体的に説明す
ると、一つ目はだれでも入れるチ
ームではなく、チームに入れる選
ばれた人間であることの自覚を持
った人間の集団を作り上げること
だ。しかしそのような集団を作る
ことは難しいので、何かチームの
目には見えないが、他とは違うもの
、例えば「自分たちのチームは練習
量で日本一である」などの付加価
値をつけてやらないと、チームに
プライドを持たない。

チームワークについて。日本は
「和の文化」であり、表面だけの結
びつきが多く、本当に強い相手と
対戦した場合など、結びつきにほ
ころびが出る。日本人はなかなか
自己主張をしないので、自分をど



サプライズのケーキに笑顔の中大路先生

のようにしたいのかを主張させ、
その風土を継続しないとチームは
出来上がらない。そして強いチ
ームワークを持った集団ができれば、
目標を持たせなければならぬ。

目標に対してどのような行動を
しなければならぬか逆算するこ
とが重要になる。例えばインカレ
の最終日は決まっているので、そ
れに向かって何をしなければなら
ないか、ピーキングをどこに持っ
ていくか、などの目標があれば、
ゴールまでの道筋がはっきりする。
ただし、チャンピオンになること
だけが目標ではないので、チ
ームのレベルに応じた目標を設定する
ことが重要だ。

ではチームワークの構築、目標
設定が出来たチームに必要なのは
なにか。それは安定化だ。人間に
は浮き沈みがある。どんなに優秀

な選手であつても、好不調があり、
チームの人間の入れ替わりも早い
場合はどうすれば良いか、何をも
つて安定化を行うか。それは指導
者の哲学的なものであり、どんな
状況に陥っても譲らない指導方
針、姿勢を保つことが重要だ。

そして最後の伸びる力。秘めた
力を集団が持っているか、チ
ームや選手が秘めた力を持っていて
も発揮しなければ意味がないので、
指導者が集団に刺激を与えてやら
ないといけない。指導者が冒険を
し、一歩踏み出す姿勢を持つと
チームは大きく変わる。これら5
つのことを心掛けて指導にあたれ
ば、チームは強くなる。私はそう
考える。

基礎研究の重要性

滝瀬定文教授（2月28日、L301）

茨木学舎はプールだけは50mがあ
つたが、施設は小さい大学だつた。
昭和47年の幻の移転計画を乗り越
え、平成元年、熊取学舎に移転。
移転する際に大学の将来像と現在
の大学の姿を是正し、大学の使命
とは何か、チャンピオンスポーツ
の隆盛とともに、健康スポーツの
必要性、地域に密着し、地域の皆
さんが誇りとしてくれるような大
学の実現について議論した。

実習では昭和41年から始まっ
た、水泳実習（平成18年終了）が
良い思い出だ。特に遠泳は大変だ
つたが、同窓会を開くと、今でも

参加した学生は当時を振り返り、
話題に上がる。研究活動では、当
時活発に研究されている先生が多
く、目標になった。海外での研究
調査の機会にも恵まれた。

当時測定不可能と言われていた
水中運動での活性酸素、また乳酸
測定は、測定器を改良して研究を
続けた。学長だった加藤橋夫先生
に相談し、大阪市大科学研究室に
国内留学、角膜障害について研究
した。異分野だったので本当に難
しく、勉強が苦しくて仕方がな
かつたのだが、国際学会で発表で
きるまでに研究を進めた。

発表者を読み上げる際、私の「大
阪体育大学」の名に会場がざわつ
いたのを今でも覚えている。その
後も角膜についての研究を進めた
が、思うような結果を得られない。
多くの先生にアドバイスをいただ
きながら発表した「エキシマレー
ザーに関する研究成果」は、WHO
の基準に採用され、大阪市医学界
市長賞を受賞した。

その後スイス・ベルラン大学に
短期留学したが、週に一度のグ
ループミーティングが大変だつた。
英語での発表はできるのだが、フ
ランス語、イタリア語が飛び交う
質疑応答にはなかなか答えられな
かつた。それでも留学生活は楽し
く、学生が開いているエアロビク
ス教室に、昼休みになると毎日通
つたことは良い思い出だ。

いろいろと研究は続けてきたが、
悔やまれることもある。健康科学
実験実習の修了だ。こういった実

習は、学生のアクティブラーニング
によるものが大きく、健康スポ
ーツコースの強みで、他大学には特別
な実習だつた。今でも骨や筋力、
運動について新たな疑問を持つて研
究を続けているが、よく思うこと
がある。大学教育の源泉ともいえ
る基礎研究の大切さだ。今、この
基礎研究を指導できる教員が少な
くなってきた。基礎研究は何
の役に立つものか、よく聞かれる。
全く役に立たないかもしれない
けど、とても面白い、研究者の感
動が伴う価値のあるものだ。これ
を学生に教えてあげたい。基礎研
究は体育・スポーツ科学全体の基
礎であり、核となる可能性がある
し、研究できるかどうか、大学
文化度のバロメーターだと思
う。応用研究を否定しないが、大阪体
育大学が発展し続けるためにも「
いつか役に立つ」基礎研究をさ
ちっとしていくべきだ。体育人
には体育・スポーツ科学や学問
などの心を満たす「夢」や「ロ
マン」を追う気持ちが必要だと思
う。



花束を受け取り笑顔の滝瀬先生（右は前島先生）

くまとりロードレース

〜和みと感動〜

くまとりロードレースは3月5日、大阪体育大学を発着点として行われた。参加者は5歳の子どもをはじめ、老若男女さまざまな世代から総勢1017人のランナー（3^キ健康ジョギングの部、456人、中学生男子の部、59人、中学生女子の部、46人、クオーター男子の部360人、クオーター女子96人）が参加した。

当日は快晴で、春の始まりを感じる天候に恵まれ、3^キ健康ジョギングの部では親子や夫婦で手をつなぎながら走る、ほほ笑ましい姿が見ることができた。そんな中、特段目を引かれる男性参加者がいた。三重県伊賀市から駆けつけた川合裕人さんで、片足での挑戦だった川合さんは「片足でも何でもできることを見せたい」とレース前に意気込みを語ってくれた。

3^キのコースはアップダウンが激しく、距離以上に過酷なコースになっている。川合さんは松葉杖を駆使し、盛大な励ましの声や、歓声を受け無事ゴールした。川合さんの挑戦は大勢の人にパワーやエネルギーを与えたに違いない。

【学生記者 坂下貴彦、写真も】



元気に走る川合さん



一斉にスタートする参加者



仲良く写真に納まる参加者と大体大生

OUHSスポーツキャンプが2月25日、青空の下開催された。本学の各施設で、サッカー、テニス、ラグビー、バレーボール、ダンス、健康増進の各プログラムが展開され、熊取町内外の約150人が、本学の教員や学生たちと、スポーツを通じて交流した。

14回目を迎えた地域交流イベントは、すっかり恒例行事として定着している。今年も開催する加者が減ったが、「今年も開催するかの確認の電話があり、地域の方に楽しみにしていたら、地域の浅野正義さん（体育学部4年）。

ちびっこレスラー 全員集合!!



堺市連盟の少年少女レスリング選手権が2月19日、大体大で行われ350人の幼児、小学生が参加した=写真=。会場の第6体育館に3面のマットが敷かれ、選手たちの熱気と声援があふれていた。

各プログラムの参加人数に大きく差が見られたが、子どもたちは笑顔満点で各種目を楽しんでいった。中には「いつもは土で練習していたが、芝生で練習できて楽しかった」などの声も聞こえ本学の施設の魅力が伝わっていたようだ。また、健康増進には10人が参加、学生との交流を楽しむ姿が見られた。

最後のスタッフミーティングでは「スポーツキャンプの魅力は、子どもたちが楽しむ以外にも学生の成長がある」と池島明子准教授。「半年間以上の準備期間があり、企画から運営までを学生が主体とな

浅野さんは「今後もっと大きなイベントやイベントの質を上げていくには、学年を超えた学生スタッフ間での連携が必要だ」と2年間の経験を次世代にバトンタッチした。

【中村優志、写真も】

OUHSスポーツキャンプ 150人快汗

アスリート・キャリア・トーク・ジャパン2017

アスリート・キャリア・トーク・ジャパン2017（JSC主催）は2月2日、東京千代田区のイーノホール&カンファレンスセンターで開催され、DASHプロジェクトの活動について、本学の目的とキャリアに関する課題を話した。

同プログラムは、アスリートのキャリア問題を主眼とし、現状報告と各分野での取り組み、解決策を発表し合うスポーツキャリア総合コンベンションで、鈴木大地スポーツ庁長官を筆頭に、元フェンシング選手で、ロンドン五輪では団体銀メダルを獲得した太田雄貴さん、元浦和レッズの堀之内聖さんら、スポーツ界のトップを極め



スピーチする筆者（右）

た選手らが引退後の思いや経験を寄した。さらに公的機関、民間企業、大学の研究成果などを一元的に集約することで、さまざまな角度からキャリア課題について検証することができた。

「変わりゆく高校・大学デュアルキャリア環境」（対談）と、「社会におけるアスリートの可能性」政財界×教育界×スポーツ界」（シンプジウム）の2講座を担当、大学という教育・研究機関の立場としての意見を求められた。中でもトップアスリートを育成するDASHプロジェクトの活動は大いに興味を集めたようで、現状の課題、企業との連携などについて回答を求められた。

現状、フルタイム化するアスリートの大きな課題と、デュアルキャリアの必要性、デュアルキャリアの発生時期は競技にもよるが、小学校・中学校・高校といった段階で実施しなければ追いつかないという部分に話題は集中。連携や補てんをどのようにするべきかといった議論が中心となった。そうした中、本学のように浪商学園として敷地内に中学校・高等学校を有する環境では、早い段階から一貫教育が実現することが可能であることから、DASHプロジェクト

のポテンシャルに興味を持ってもらえたようだ。

アスリートのキャリアに関する問題は、89年から保健体育審議会より政策が打ち出されているが、まだ多くの課題が残されている。

課題の解決がなされていないまま、五輪で勝てるトップアスリートの輩出は必須であることから、相反する問題の改善は遅々として進まなかった。しかしデュアルの実現は絶対課題であることから、3年後の2020年までにこの問題のシステムチックな解決は、多くの専門家が口を揃えるところだ。「デュアルキャリアの成熟無くしてセカンドキャリアへのスムーズかつ有効な移行は望めない」——声を大にして語ったところであり、多くの専門家が唱えるところだ。アスリートの人間力とパフォーマンス力の両面の育成が急務であることが浮き彫りになっている今、官民、教育機関が一堂に介して討論できたことは非常に有意義であり、次へのステップにつながることを実感した。

【学長室DASHプロジェクト担当ディレクター 浦久保和哉】

スキー実習に208人

長野県支部のOBも

今年度のスキー実習は2月6日から10日まで、長野県菅平スキー場で行われ、総勢208人の実習生が参加した。

初日は班分けテストを行い、レベル別に22班に分かれた。67人の学生はスキーをしたことがなく、ブーツの履き方や、スキー板の付け方からのスタートになった。2日目以降は、実習の半日を使ってラングラウフ（クロスカントリースキー）を行い、ゲレンデ外の大自然へ出かけた。ラングラウフは滑るだけでなく、歩くことも斜面を登ることもできるので、森の中でティータイムをしながら自然を満喫した。

4日目はこれまでの成果を試す模擬検定が行われた。滑る前の緊張感、班の仲間の応援、力が発揮できた人、そうでなかった人、いろいろな思いの詰まった模擬検定だったが、それぞれの実力が試されたことと思う。

また、夜の講義では今年度で退官される中大路哲先生に、かつてのスキー実習について話をしていた。先生はスキー実習の主任、副主任を長年され、50年続くスキー実習を支えてこられた方である。先生ご自身はスキー実習に来られるのは何十年ぶりかで、今は実施していない根子岳ツアーや、

若かりし先生方の逸話などを話された。

2日目の夜は、福井大学の水沢先生から「スノースポーツのリスクマネジメントについて」の講義を受けた。また、3日目には摂泉会（大阪体育大学OB会）、長野県支部会から、6期生の松原さん、西村さんが実習の激励に来てくださった。

スキー実習でのさまざまな気づきを大学に持ち帰り、より充実した学生生活にして欲しいと思う。最後になりましたが、スキー実習にご協力いただいた先生方、職員の皆様にご挨拶申し上げます。

【スキー実習副主任、体育学部准教授・伊原久美子】



熱気あふれる参加者たち

特別支援教育 教育講演会

障がい児・者の正しい理解と適切な支援を行うために



報告する曾根講師

が、より明確に把握できると紹介した。

ランチセッションでは、本学の安田友紀講師が指導する、アマカマ・ドウによる創作ダンス「モジモジ運動会」が披露され、会場から大きな拍手が送られた。この後、幼児から高齢者、障がいの種類、性別を問わない人が踊る発表会の動画を紹介、「地域と教育と企業の3つが協力していきたい」と語った。

岸和田市教育委員会の松本真理さん、岸和田支援学校の大植布美教諭は、「岸和田市、佐野支援学校、岸和田支援学校の共同研究「地域の支援教育の充実を目指して」を紹介。貴重な取り組みの内容が発表され、実際に支援学校で働く教員から質問が相次いだ。

本学健康福祉学部主催の地域公開講座「特別支援教育 教育講演会」が、3月5日、大阪河崎リハビリテーション大であり、大阪を中心とした、近畿圏の特別支援学校で働く教員や、小、中学校の特別支援担当の教員71人、本学の教員、学生スタッフなど約110人が参加した。

講演会は4部構成で、横浜国立大教育人間科学部の徳永亜希准教授が「特別支援教育実践充実のための、国際生活機能分類（ICF）の活用」をテーマに話した。同准教授は実際にいた障がい児の特徴を紹介し、ICFの枠組みに当てはめた際に、紹介した障がい児のこれからの教育の中心な課題

を間違えると危険な事故につながる」と指摘した。

【中村優志、写真も】

退職教員の会

略称、大体大RTに

平成28年度大阪体育大学退職教員の会（会長、増原光彦名誉教授）の総会と懇親会が2月18日、大阪市天満の大阪キャッスルホテルに33人が参加して開かれた。写真。同会は15年12月に発会、第1回総会を開き正式にスタートした。

本学で教鞭を執った教員を主たる会員として「会員相互の親睦と情報交換を図り、併せて大阪体育大の発展に寄与すること」を掲げて活動している。

総会では元学長の田口守隆名誉教授の逝去が報告され、全員で哀悼の意を捧げた。平成27、28年度の事業報告、決算報告、平成29年度の事業案、予算案が全会一致で承認された。また会の略称を「大体大RT (Retire Teacher)」とすることに決まった。

懇親会は副会長、河島英隆名誉教授の乾杯の発声でにぎやかに始まった。男子剣道部の優勝祝賀会にも元気な姿を見せた96歳の鷹野健次先生、バスケットボール界の

大御所、細川磐先生、バイオメカニクス研究の第一人者、金子公宥先生、本学ダンス部の礎になっている林信恵先生など多くの教職員が本学の黎明期から活躍、今日にふないでいる。

学園・大学から、西尾一実常務、荒木雅信教授、摂泉会（大学同窓会）から澤野潔、徳久貴男両理事が参加、荒木教授が創立50周年を記念して開催した、日本体育学会が成功裏に終わったことなど大学の近況を、参加者はそれぞれの近況を話し合い、時のたつのも忘れて昔話を花を咲かせていた。



高齢者1人 支えるのは1・2人

社福連絡協

本学健康福祉学部の社会福祉・精神保健福祉実習施設連絡協議会が2月16日、天王寺都ホテルで行われ、教職員、社会福祉・精神保健福祉機関・施設や関係団体の関係者らが参加した。

学生による実習報告では、児童養護施設へ行った西尾あずささん（健康福祉4年）が「子ども自身の深い部分を理解するためには、入所までの生活歴、家族関係、施設での人間関係、学習面など、全ての場面からその子らしさを見つけ、そこに焦点をあてて支援計画を作成することが大切だ」といった児童自立支援計画における支援者の視点からの重要性について発表した。

また特別講演では、服部真司さん（一般財団法人医療経済研究・社会保険福祉協会 医療経済研究機構 研究部研究員兼研究総務部次長）が「地域包括ケアシステムと次期介護保険制度改正の動向」について講演を行い、「1965年は65歳以上1人に対して20歳からは64歳は9・1人という「胴上げ型」だったのに対し、2050年には推計1・2人の「肩車型」になり社会保険改革により、支え手を少しでも増やす努力が必要だ」と述べ危機感を募らせていた。

最後に行われた情報交換会でも参加者は活発に議論しながら交流を深めていた。

国際ストレンクス学会 INTERNATIONAL CONFERENCE ON STRENGTH TRAINING (ICST)

活動報告

大阪体育大学大学院 川上 諒



務をこなせるようになり、自身身の成長を感じることができた。学会関係者の方のご厚意により、業務の合間を縫って講演を聞くことができた。講演を英語で聞くことが不慣れな私は、講演演者

第10回国際ストレンクス学会 (ICST) が、16年11月30日から12月2日まで、龍谷大響都ホールで開催された。国際ストレンクス学会とは、欧州や米国、豪州、アジアや南米など世界各国からストレンクストレーニング (以下ST) にかかわる研究者や、トレーニング指導者などが参加する学会のことで、学会ではSTに関する研究発表や講演が行われる。



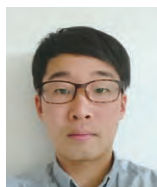
受付をする筆者 (右から2人目、座っている)

今回、私を含めた大阪体育大学の院生、学部生14人は同学会にボランティアスタッフとして参加した。きっかけは、同学会の実行委員である下河内洋平准教授 (現教授)、三島隆章准教授に参加を打診されたからだ。国際学会であることから学会はすべて英語で行われ、また海外から多くの参加者が来場することもあり、英語ができない私は、多少ちゅうちょする気持ちもあった。しかし、貴重な機会となると考え、参加を決めた。

主な業務は、会場設営、参加者受付、会場案内等で、英語が堪能な院生や学部生は、関西国際空港でのゲストスピーカーの出迎えや、会場受付での質問等を英語で受け答えるなど、国際学会の運営には欠かせない重要な役割を果たしていた。私が学会で行なった主な業務のひとつに、外国人参加者の受付があった。初日は戸惑うことが多かったが、通訳の方に、暇をみつけては英語の受け答えに必要なフレーズを覚えていただいたお陰で、最終日には滞りなく受付業

延世大との大学院国際 学術交流会に参加して

大学院助手 栗野 聡



の発表内容を理解することが容易でなかった。しかし、少しずつ英語に慣れ、わずかだが、STにおける最新の情報を得ることができた。本学からはボランティアスタッフだけでなく「STRENGTH TRAINING AND INJURY PREVENTION FOR TEAM SPORT」という題目での基調講演者として下河内准教授、学会発表者として三島准教授、本学大学院生3人が参加した。日頃本学で講義を受けている先生方や、一緒に研究をしている院生が、国際学会で講演や発表する姿を見ることもできたことも、同学会に参加して得られ

た貴重な経験のひとつだった。同学会に参加したお陰で、国外の参加者や、他大学の学生と交流することができた。受付業務を通じて得られた英語でのフレーズをはじめ、たくさんの方の協力のお陰で、十分とは言えないが国外の参加者とコミュニケーションを取れるようになったことは、大きな自信となった。貴重な体験を今後の自身の活動につなげたいと考えている。また、国際学会にボランティアスタッフとして参加できる機会は減多にないことから、参加をお声掛け下さった下河内、三島両先生に、感謝申し上げます。

韓国ソウル市にある延世 (よんせ) 大学で、2月28日から3月3日にかけて、本学と延世大が、大学院国際学術交流を行った。参加したメンバーは、下河内洋平教授と本学大学院生5人、延世大からは、体育学科長や大学院スポーツ医学・アスレティックトレーニングプログラム長、そして統合スポーツ科学研究実験室 (ISSRL) の実験室長を務めるヤン・セーリ博士と大学院生15人。延世大は2015年から18年まで、世界に9カ所ある国際オリンピック委員会 (IOC) の「傷害予防とアスリート の健康保全のための国際オリンピック委員会研究センター」 (ISSRL) に認定され、同じスポーツ医学の分野で研究を行って

いる下河内研究室と、共同の研究発表会や、将来的な研究コラボレーションの話し合いなどを行った。初日は合同研究会を開き、それぞれの大学院生が取り組んでいる研究の発表を行った。あいにく、セーリ博士は、トラブルのため米国から帰国することが難しくなり、スカイプでの参加となった。II 写真

本学からは5演題、延世大からは3演題の研究発表が行われ、3時間にわたって活発な議論が交わされた。2日目はISSRLで、延世大の大学院生により、経皮的電気刺激装置を用いた足部内在筋の筋活動を学習させるバイオフィードバック法の紹介があった。

研究の興味が似ている本学大学院生の小村祐介氏は、興味深く手順を学び、熱心に議論を行っていた。また、修士論文で、「肩関節の投球障害に関してバイオメカニクスの実験」を行った私も、3次元動作解析のための反射マーカールの取り付け方や、関連文献の紹介などを延世大の大学院生に行った。韓国で2番目に大きなキャンパスを持つ延世大には、大学院生を含め約4万人の学生が在籍している。

そのため多くの施設や、研究棟が広大なキャンパスに点在しており、驚くことに、施設見学を行うためには、キャンパス内を自動車で移動する必要があった。

今回の大学院国際学術交流を通して、延世大の大学院生の研究へ取り組む姿勢や、英語力を肌で感じる事ができた。延世大の大学院では、研究発表や論文執筆を全て英語で行っている。普段から英語に接する機会が多いからか、本学から参加した大学院生よりも、延世大の大学院生は、今回



バイオフィードバック法を紹介する延世大院生たち

の合同研究会での質疑応答にもスムーズに受け答えをしていた。今回の参加で、外国の研究者たちともスムーズな議論が行えるように、英語をより身近なものにしたいという気持ちが強くなった。また、研究室内だけでなく、学外や外国の人たちとも研究について議論すること、より視野が広くなり、自分自身の研究を深く考えることが出来るようになることと実感出来た。韓国滞在中、手厚く歓迎して下さった延世大学の皆様に記して感謝の意を示したい。

男子体操部 中国、豪州チームと合同練習

国際交流も

本学の男子体操競技部が、中国の浙江体育職業技術学院、豪州ナショナルチームと相次いで合同練習、体操競技を通じて国際交流を深めた。浙江体育職業技術学院は11月20日から26日まで、選手5人、指導者4人が来学、豪州ナショナルチームは12月12日から17日まで選手7人、指導スタッフ5人が来

学、合同練習や国際交流をした。技術学院は競技のプロ選手を育成を行っている高等学院で、1984年のロサンゼルス五輪以来12人の金メダリストを輩出するなどの実績を残している。今までも複数回合同練習は行われてきたが、中国と豪州の選手のパフォーマンスはレベルが高く

て、本学の選手にとって参考になるものばかりで刺激をもらった。歓迎会では、互いの文化、価値観や考え方の違い等を知ることができ、自国のことを話したり、他国との違いを知ることによって自己を再認識できる機会になった。

【学生記者、坂下貴彦、写真も】



記念品を交換する選手たち（左が大体大生）



大体大タオルを広げる豪州チームと大体大生

コラム

ボーンシャイ 体育学部名誉教授 滝瀬 定文

ツリビトの寒さを数字で表してみよう

桜もここ数日花冷えが続く。ある寒い日、ふと思いついた。オキアミ冷蔵庫の中は、どんなに寒いんだろう…釣りの防寒着は役に立つのだろうか…というシンプルな疑問がわき起こりました。底冷えする波止で、磯で、船で、イカダでじんじんする足の先が、私はつらい、チョーつらい。果たして釣り師はどれくらい寒い目にあっているのか、どれくらい寒期の釣りは悲惨なのかと考えるくらいなら「それじゃあ釣りに行かなければヨロシイ」という意見は、ごもつとも。しかし、そんなことは釣り師にはまったく通用しない。ではいったい、寒い釣り場で我々の体温はどれくらい低くなっているのか。釣りの防寒と呼ばれるものは、どれくらいの威力があるものなのか。

じゃあ、いっぱつオキアミの冷凍庫にでもしばらく入ってみるか。実験1では、17.5℃（風速0m）での1時間の釣行、その後10℃（風速3m）で1時間（計2時間）の釣行を想定した条件での前脛骨部、大腿部、広背部の皮膚温の変化を測定した。まず、体重と身長を測り、体脂肪の割合を算出する。上半身裸になって、ズボンを下ろす。オヨヨという間に体中、体温センサーだの節電図用電極が張り付ける。実験開始から60分後、前脛骨部皮膚温の急激な低下が見られた。また広背部は、ヒップガードをあてているため、皮膚温の低下が少なかった（図1、図2）。

実験2は、「気温0度、湿度約70%、風速3ノット」の環境条件で30分の入室。2パターン。1回目は普段釣り場で考えられる最高の防寒スタイルで、その時の体温の変化、筋肉の震えなどを測定する。2回目は1回目よりも薄着で同様の実験を行う。しかし、実験というもの現場での思いつきが優先する。「釣り場で温かいもの食べたら身体の芯から暖まるっていうでしょ?」「そやね、実験中にカップメンでも食べてみたら直腸温あがるやろな」「直腸温?」「そう直腸。肛門のちょい中。ヒヒヒッ」かくして哀れ、2回目の実験で、自らお尻にセンサーを突っ込むハメとなる。さてさて、気温0度、風速3ノットという極寒の環境で体温と身体の芯は、いかなるデータをはじきだしたか（図3）。

花冷えの中、犬鳴山の桜も間もなく満開を迎える。栄養にとんだ海水と太陽の恵を一杯受けすくすくと成長する稚魚のように。桜の開花と共に、春の訪れを喜びながら、同時に、桜の花の美を嘆賞しつつ、形や色の美しさだけでなく、桜が持つ葉隠に散りとどまれる花のみぞ「時」のはかなさを感じる。



図1 釣りを想定した環境制御室での実験

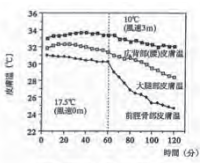


図2 釣行中の皮膚温の変化

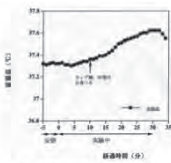


図3 釣行中の直腸温の変化

※ご愛読いただきました滝瀬先生のコラムは今号で終わります。次号からは健康福祉学部・和田隆夫教授が担当します。引き続きご愛読ください。

築立つ633人

～大学院修了式、学部卒業式～

平成28年度大阪体育大学大学院修了式、大阪体育大学卒業式は3月17日、スターゲートホテル関西エアポートの国際会議場で行われた。写真1。

開式の辞の後、大学院博士後期課程修了生4人、博士前期課程修了生16人、大体育学部484人、健康福祉学部129人、合わせて633人に学位記、卒業証書が授与された。次に表彰が行われ、大島謙吉賞と大島謙吉奨励賞が山本沙羅さん（体育学部）ら9人に、加藤橋夫賞が大野直紀さん8大学院博士前期課程）ら3人に、スポーツ優秀賞が52人に、学業優秀賞が19人に、功績賞が9人に、優秀論文賞が近藤みどりさん、法所遼汰さんに（ともに博士前期課程）と授与された。

岩上安孝学長は式辞で「大阪体育大学入学以来たゆまぬ努力と研さんを積み重ね、本学所定の学業を修め、晴れて、博士、修士、学士の学位を得られましたことを祝し、心からお慶びを申し上げます。スポーツ・学術面で優れた成果を修めた皆様、我が国スポーツ界、学術界の先駆者であり、本学草創期を支えられた両氏の名を冠した大島謙吉賞、加藤橋夫賞をはじめ、スポーツ優秀賞、学業優秀賞、功績賞、優秀論文賞をお贈りしましたが、これに甘んずることなく更なる精進、活躍を期待しております」と次のステージに進む卒業生を祝い、励ました。

長家秀博同窓会会長が「皆様の今後のご活躍とご多幸を願っています」と祝辞があり、卒業生からの記念品の贈呈、在校生を代表して大西翼学友会会長の送辞、同窓会からの記念品として学友会からの記念品贈呈の後、大学院、体育学部、健康福祉学部代表者が謝辞を述べ、全員で学歌を斉唱して、幕を引いた。

【学生記者 坂下貴彦、写真も】



窓

◆◆新入生の皆さん、入学おめでとうございます。社会に羽ばたく人もいれば（上記掲載）、皆さんのように入ってくるフレッシュな人もあります。大阪体育大学は「文武両道」を目指す環境は十分に整っています。後は皆さんがこの環境をしっかりと使うかどうかです。宝の持ち腐れにならないように、頑張ってください。◆◆4月は人事異動の季節でもあります。当ジャーナル室でも動きがあります。発行責任者が白須和平企画広報室長に代わり、石川朋宏室長に、編集助手は増田知己君から、今春本学を卒業したばかりの中村優志君に、学生記者の竹村岳君がサンケイスポーツ記者として巣立ち、体育学部3年の松本直也君が新たにスタッフに加わります。◆◆マスコミ界で活躍している本学卒業生は11人ありますが、うち5人は当室から送りだしました。新入生でマスコミに関心があれば、ぜひ当室をのぞいてください。2年、3年生も大歓迎です。

【相馬卓司】

我が青春の記

体育学部講師

比嘉 靖



生涯の仲間との出会い

小学校のころから体育の先生にアコがれて
いた私は、大学進学は恩師の勧めもあり、高
校の先輩が多数進学していた大阪体育大学に
決めた。
体育教員を目指した大学生生活は、学業もさ
ることながら、クラブ活動中心の大学4年間
であったように思う。私の専門種目はバスケ
ットボールで、同期はもちろん、先輩方や後
輩たちと目標に向かって、日々切磋琢磨（せ
つさたくま）した練習や、同期たちと声を掛
け合い、助け合いながら乗り切った1年生の
ころの出来事など、今も忘れられない思い出
の一つとして記憶に残っている。
特に思い出深く残る記憶の一つに、1年生
時の仕事の一つである、リバウンドが挙げら

れる。チーム練習後に先輩の放つシュートを
床に落とさず、リバウンドすると言う単純な
仕事ではあるが、これがなかなかキツかった。
いつまでも打ち続ける先輩のシュートを、ひ
たすら拾い続け、時には1時間を超えてリバ
ウンドすることもあった。
また、ある時には床にボールを落とし過ぎ、
先輩に集合をかけられ、1年生全員に理不尽
なペナルティーを課せられたこともある。こ
んな時は決まって練習後、同期の下宿先に集
まり、その理不尽さに皆で愚痴をこぼし、
慰めあったものだ。
厳しい1年間を乗り切り、私の大学生活の
中心であった、同期の仲間と苦楽をともに過
ごしてきたクラブ活動を通して気付いたこと

は、社会に通用する精神力を学び、相手を思
いやる心を持つことの大切さ、そして何より
も仲間とともに
目標に向い、や
り遂げることの
素晴らしさを学
んだことだ。大
学4年間で得た
貴重な体験は、
指導する立場に
なった自身に大
きく生かされて
いると思ってい

体育学部教授

下河内洋平



スポーツ現場と科学をつなげる

小学3年生から体操競技ばかりに打ち込ん
でいた私は、高校時代から、体操をやめた後
の生き方に悩んでいた。体操競技は、日本大
学大学院の修士課程まで続けたが、ここで、
次の生き方を決定づける2つの体験をした。
一つは、大学院1年生の時に、長野五輪の
クロスカントリースキーチームの科学サポー
ト班に同行したこと。実際のレース中の選手
のデータをコース脇で測定し、それを次の日
までに分析し、チームに還元する、という仕
事である。これを通じ、科学とスポーツ現場
に大きな溝があることを感じた。一方で、私
自身は、科学的データを現場に還す作業に面
白さや充実感を感じ、将来的に、科学と現場
をつなげる仕事をしたと考えるようになる
ようになった。
もう一つは、修士論文の執筆に苦しんでい

る時期に、さまざまな科学的知見が、脳裏で
一つの線で結ばれ、定説の理論を理解できた
瞬間、体操競技で新しい技や身体感覚を会得
したときの快感や高揚感に類似した感覚を覚
えたことである。これが決定打となり、一生
研究を続けていくことを決心した。そして、
現場での指導能力を得ること、スポーツ科学
の専門家になることの2つが、科学と現場を
つなぐためには必要だと結論に至り、アス
レティックトレーナー（ATC）の米国国家
資格と博士号の2つの取得を決心し、周囲か
ら無謀と言われたが、1999年に渡米した。
当初は英語が全く出来ず苦労した。しかし、
人間、一歩足を踏み出せば何とかするもので、
2003年にミネソタ州立大でATC、
2006年にはノースカロライナ大学で博士
の学位を取得した。その後、博士研究員とし

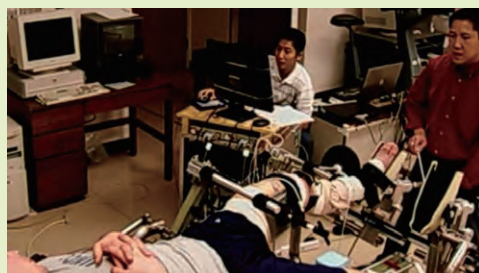
て同大学で1年ほど働いた後、本学に教員と
して就任した。現在は、研究・教育活動を行
うとともに、女子ハンドボール部の身体づく
りを指導してい
る。ここ数年で、
やっとなら科学と現
場の両方を発展
させる良い環境
が出来た。理想
を見つつ現実を
離れず、10年以
上、目標をぶら
さず努力を積み
重ねると、それ
なりに夢を実現
できるものだと
感じている。



恩師の中大路先生、木村先生（前
列）と筆者（左）



同期のメンバーと試合に移動する
際の写真（一番右が筆者）



ミネソタ州立大での筆者



極める力。

人を学び、育て、支える。

大阪体育大学

【大学院】

- 博士 前期課程 後期課程

【体育学部】

- スポーツ教育学科
- 健康・スポーツマネジメント学科

【健康福祉学部】

- 健康福祉学科

【教育学部】

- 教育学科

企画広報室

大学事務局

庶務部、教学部、入試部
キャリア支援部、大学院事務室

大学附置施設

図書館、社会貢献センター
情報処理センター
スポーツ科学センター

支援組織

教養教育センター、キャリア支援センター
教職支援センター、学習支援室
学生相談室・カウンセリングルーム

<https://www.ouhs.jp>